

## 雄雉香炉

当館で最も重要な作品のひとつである雄雉の形をした陶製の香炉。17世紀、高名な陶芸家である野々村仁清によって制作された。

仁清は、京都で生まれた絵付け陶器である京焼の大成者として知られている。仁清の優美な作品は武士階級たちに、茶の湯や茶道具として大いに好まれた。この雄雉香炉のように、今も残っている京焼の初期の作品の多くは茶器である。通常、茶会の席では、亭主が床の間に花や季節の飾りを置くのが一般的である。雉は伝統的に春に関連付けられているため、この香炉は春の集まりで使われ、部屋に香りを漂わせ、季節感を演出したのであろう。

この作品には、仁清の高い技量を示すいくつかの点がある。羽根は、仁清の時代に中国からもたらされたばかりの画期的な装飾技法である「色絵」を用いて、写実的に表現されている。色絵とは、釉薬をかけて焼いた作品の上に、色釉を塗り重ねていく技法である。その後、再び低温で焼成し、2層の釉薬を融合させる。絵の具は流動性を持ち、焼成中に発色ため、陶芸家はさまざまな温度での絵具の挙動を熟知し、目的の効果を達成する必要がある。

雉の造形も見事なものである。わずかに傾いた頭部から生き生きとした佇まいが伝わってくるが、仁清は粘土を丁寧に重ねることでそれを実現した。また、雉の長い尾の水平な角度は、粘土が自重で垂れ下がったり、焼成中に割れたりするため、達成するのが非常に困難だ。尾の裏側にある2つの痕跡は、仁清が焼成中に支えを用いて尾の位置を維持したことを示しているが、このような方法は決して成功を保証するものではない。

仁清は当時の一流の職人のひとりであり、著名な陶芸家として最初に、作者を特定できるサインのような印、「陶印」を作品に施した。これは、陶芸家が無名の労働者から一人の芸術家として認知されるようになったことを意味している。この雄雉香炉では、蓋の内側（煙出しの横）と底に仁清の印が見られる。

巧みに表現された雉の形と、仁清の見事な色絵により、1951年に国宝に指定された。仁清の「雄

雉香炉」は、「雌雉香炉」とともに、当館に常設展示されている。